

週日の説教

金 大烈 神父 2011年7月14日(木)

《人間万事塞翁が馬 ～どんな時にも明るい考え方、希望的な考え方をしましょう～》

今日は、皆様がよくご存知だと思ふ中国の故事について、一緒に考えたいと思います。

昔、中国の北の方の境の近所に一人の老人が住んでいました。その老人は1匹の馬を飼っていましたが、ある日突然その馬が逃げ出し、国境を越えて更に北の敵の国へ行ってしまいました。周りの人々は、「1匹しかいない馬が逃げたまって気の毒に。」と慰めに行きます。すると老人は、「まだこれが不幸だとは言えないでしょう。この不幸は幸福になるかもしれない。」と言います。数か月後、逃げた馬は敵の国から立派な駿馬を連れて戻って来ます。人々が「老人の言ったとおりになった。不幸が幸福になった。」とお祝いに行きます。すると老人は、「まだこれが幸福だとは言えないでしょう。この幸福は不幸になるかもしれない。」と言います。数日後、老人の息子がその駿馬に乗っていて落馬し、骨折をしてしまいます。人々は「やはり老人の言ったとおり、幸福は不幸になった。」と言いながらお見舞いに行きます。すると老人はまた、「これが不幸だとは言えないでしょう。もっと大きな幸福になるかもしれない。」と言います。1年後、隣の国との戦争が起こり、周囲の若者はほとんど戦死してしまいます。しかし老人の息子は、骨折していたために兵役を免れて命が助かりました。

この話は、「人生は吉兆・禍福が予測できない。だから簡単に喜んだり悲しんだりするべきではない。」ことのたとえで、『塞翁が馬』と言われる故事成語のもとになる話です。

カトリック信者というのは、希望を持つものだとされています。『希望を持つ人』というのは、考え方が肯定的な人のことです。何かを考える時、いつもよいほうに、肯定的に考える人です。だからカトリックの信仰は、「希望の信仰」とされています。その信仰を持っている私たちは、いつも肯定的な考え方をしなければなりません。それは分っていますね。では皆様は、肯定的に、どんなことがあっても笑顔を保ち、「神様が何とかしてくださる。」と思っていられませんか。曖昧な笑顔を見せている方は自信が無い方でしょう。(笑い)

もし皆様が不幸なことに襲われたら、どのように考えますか。模範的な解答を申し上げます。「イエス様が負われた十字架よりは、はるかに軽いのだろう。このくらいの十字架ならば、イエス様の十字架の道と一緒に与るつもりになろう。」という余裕のある考え方をすべきです。そして、幸いなことが起こった時には、「やはり神様が私を守ってくださったのだ。」と考えるのがよいでしょう。

先ほどの故事の老人のような知恵が、私たちには何よりも必要なかもしれません。どんなことが起こっても、神様に委ねる心があれば、肯定的、希望的な考えに導かれると思います。「今は全く先が見えない。」と思い、痛みを感じるかもしれません。また逆に、「今の幸せはずっと続くのだろう。」という錯覚に陥っているかもしれません。しかし、全てのものは去ります。行ってしまいます。しかし最後に残る目的は変わらないでしょう。その目的がいつでも私たちの基準になれば、やはり私たちは

肯定的に考えるようになると思います。

ミサの前に、「夫婦のためにこのミサを捧げたい」という話をしました。夫婦生活には童話のように美しいものはほとんどないのでしょうか。悩みばかりの生活なのでしょう。私は結婚したことがないので分かりませんが、父と母の生活を見ていたら、やはり家の外から見る夫婦生活と家の中の夫婦生活とは違っていると感じていました。(笑い) どの家庭にもそういう面があるのでしょうか。ですから、望ましい夫婦関係を保ち、子どものことを考えながら家庭を守るためには、やはり肯定的な考え方、どんなことがあっても相手を肯定的に見ようとする目が一番必要ではないかと思います。

私たちにどんなことが訪れるか分かりません。それが幸か不幸かに関係なく、私たちはいつも明るい考え方、希望的な考え方をしましょう。そのためには、やはり委ねる心が何よりも必要ではないかと思います。

ありがとうございました。

—ミサ後—

『運命』というのは、「幸運な人はいつもよい結果となり、不運な人はどんなに頑張ってもよい結果にはならない。」というように、人間の意志に関係なく幸、不幸が決まってしまうものを言います。しかし、カトリックの『運命』の考え方は、「神様に委ねるか、委ねないかによって変わるもの」です。ですから、「私はこのような運命を負って生まれてしまったから仕方ない。」というような言葉は絶対に使わないでください。自分がみ心に委ねるかどうかが、任せるかどうかによって変わるのが、本当の『運命』であることを意識してください。